

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02779

研究課題名(和文) 小学校英語教科化と小中連携に対応した効果的な文字導入・文字指導に関する研究

研究課題名(英文) On English Letter Instruction Adapted to Compulsory English-Language Education in Elementary Schools and Bridging the Gap Between Elementary and Junior High Schools

研究代表者

中村 典生 (NAKAMURA, Norio)

長崎大学・教育学部・教授

研究者番号：70285758

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：小学校英語の教科化に伴い、高学年で文字が導入されることとなった。しかしながら、これまでの外国語活動の成果を踏まえた、効果的な文字指導の方法は確立されているとは言えない。本研究では、移行期に先がけて文字指導を行っている小学校を調査し、その傾向を知るとともに、それを踏まえて日本の小学校英語教科化に則した文字指導として、明示的な指導を行わない文字指導、ICTを活用した文字指導、文構造の指導へと繋がる文字指導を明らかにし、提案したものである。

研究成果の概要(英文)： Following the new course of study, the teaching of English as a formal subject has begun, and the instruction of English letters has also been introduced into the fifth and sixth-grade public school curriculum. However, it can not be said that effective teaching methods capitalizing on the progress of English activities have been established.

In this study, elementary schools already engaged in letter instruction prior to the current transitional period were surveyed and their instructional tendencies were examined. Moreover, implicit instruction of letters, ICT-based instruction, and teaching methods connecting letter instruction to the teaching of sentence structures are proposed.

研究分野：英語教育学

キーワード：文字指導 外国語活動 教科化 小中連携 ICT

1. 研究開始当初の背景

英語教育改革の在り方に関する有識者会議が2013年より9回実施され、2014年9月に終了した。その報告の中には、小学校中学年から外国語活動を開始し、高学年からは「読む」「書く」の態度育成を含め、教科としてコミュニケーション能力の基礎を養う、という文言が盛り込まれた。移行の時期としては、東京オリンピック・パラリンピックが開催される、2020年が示されていた。

以上の文言に、「読む」「書く」という文言が含まれたことが大きな反響を呼んだ。というのは、2011年に小学校5・6年生で必修化された外国語活動においては、音声を中心とし、基本的には文字(読むこと、書くこと)は扱わないという方針がとられており、文字指導を行うこと自体がタブー視される傾向さえあったからである。

一方、音声中心の方針がかえって中1ギャップの主たる要因となっているという指摘もあった。中学校で文字が導入された途端につまずき意欲を減退させる生徒が、外国語活動導入前よりも目立つという理由からであった。事実、文部科学省が平成24年度に行ったアンケート調査では、8割前後の中学生が、小学校の英語の授業でもっと学習しておきたかったこととして、英語の単語や文章の読み書きを挙げていた。以上より、小中を円滑に連携・接続するための文字指導をどうすべきか、ということが、当時すでに大きな問題となっていたことがわかる。

更に小学校5・6年生で教科化ということになれば、単なる中学校の前倒しではなく、小学校高学年という発達段階とこれまでの外国語活動の成果も考慮し、より丁寧な文字指導を行う必要が生じる。前述の中1ギャップの問題を考へても、文字導入・文字指導の成否が、教科化の成否にかかわると言っても過言ではない。この問題を解決することは、教科化前に対処すべき急務であったことがわかる。

問題の所在は文字指導の方法論が確立されていないことにあった。小学校英語の教科化に対応し、かつ小中の効果的な連携・接続に貢献することができる、新たな文字指導を提案することが急務であったのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、次の(1)~(4)で示す問題を解決することにより、小学校英語の教科化に対応し、かつ小中の効果的な連携・接続に貢献することができる新たな文字指導を提案することである。

- (1) 実際にすでにどのような文字導入・文字指導が行われており、それがどの程度の成果を挙げているか、ということが明らかになっていないこと。

- (2) 小学校高学年という発達段階と、音声中心である外国語活動の成果を踏まえた文字指導が明らかとなっていないこと。
- (3) 中学校入学当初などで、がむしゃらに書かせて覚えさせる指導がいまだに根強いこと。
- (4) アルファベット文化である西洋諸国の指導方法(例えば phonics など)を、漢字カナ文化である日本にそのままあてはめようとしようとしている傾向があること。

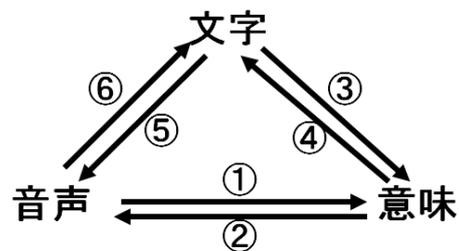
3. 研究の方法

初年度は、アンケート、授業参観、聞き取り等により、現在実際に行われている文字導入・文字指導に関するデータ収集を、徹底的に行う年度とする。また初年度後半には収集したデータの整理を始める。

2年目、3年目は、引き続き調査・資料収集を継続しながら、文字指導の整理・分類を試みる。また、その整理・分類を参考にしながら、小学校高学年という発達段階と、音声中心である外国語活動の成果を踏まえた文字導入・文字指導を考案・開発するとともに、効果的なICT教材の製作を行う。また、考案・開発した教材については、できる限り協力者を募り、現場で使用してもらうなどして、その効果を検証する。

以下、実際に目標と照らし合せて説明する。

(1)については、教育課程特例校、研究開発校、拠点校などを中心に調査を行い、先行的な文字導入・文字指導の現状を明らかにするとともに、中学校入門期におけるにおける文字指導の現状とその問題点を明らかにする。その際、独自に考案した多角的語彙習得モデルや目標とする技能のレベル(アルファベット・単語・文レベルなど)等々を分類肢とし、文字指導を様々な角度から分類・整理することを試みる。多角的語彙習得モデルとは、以下に示す語彙習得に係る関係性のモデルである。



これは、語の習得は「音声・意味・文字」の関係性を習得することが語彙習得の一面であるという考え方に基づいたモデルで、その指導法が①~⑥どの矢印をターゲットにしたものであるか、という分類にも役立つものである。

(2)については、①外国語活動の成果を踏まえ、文字に関する技能を明示的に教えるのではなく、活動に組み込んで指導する方法や、②文字を単語としてのまとまりや、文の切れ目・語順意識を高める道具として利用するような指導方法を明らかにする。(①-②)は他に類を見ない画期的な研究であり、本研究で最も独創的で重視される部分である。

(3)については、文字指導のための ICT 教材を考案し、そのサンプルを製作することで、効果的な活用方法を明らかにする。その際、ICT の専門家に依頼し、アプリケーション作成を試みる。

(4)については、(1-3)の成果を踏まえ、日本ならではの文字導入・指導法を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 実際に現在どのような文字導入・文字指導が行われているか、ということが明らかとなった。具体的には、phonics 的な読み方の規則・法則を指導する傾向が見られ、それが唯一の文字指導法であるという意識が高いことがわかった。一方で、文字と意味をつなげる活動がほとんど行われていない傾向や、ペンマンシップ的な文字をひたすら書く指導を、短時間学習の時間等に行う傾向があることもわかった。

(2)小学生が英語の単語を読めることと、その意味がわかることはどう関係しているのか、ということが明らかとなった。これは、小学生を対象に実施した語彙技能に関する調査と、小学校教員を対象に実施したどのような文字指導が実際に行われているのかというアンケートをもとに、小学生の語彙習得の傾向、特に文字を見てどう意味をつかむか、というプロセスについて明らかにしたものである。具体的な成果は以下の通り。

①decoding (文字列の音声化)のプロセスは、文字から意味へのアクセスのために単語レベルでは不可欠であるとは言えない。したがって、decoding を促すような phonics 的な指導に偏り過ぎない方がよい。

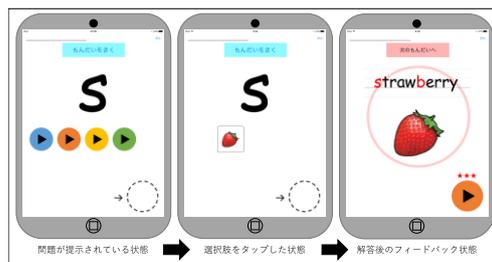
②入門期の文字指導の前に、音声中心の指導が十分になされている必要がある。

③文字習得には何らかの「型」が個々人で存在する可能性があるため、それに合わせた指導を考える必要がある。

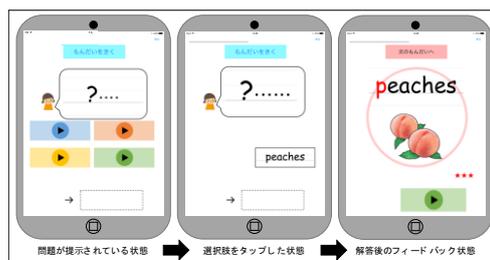
(3)倉田伸長崎大学教育学部准教授の協力を得て、小学校英語の教科化に向けた文字指導を支援するアプリケーションを開発し、実際に現場で使ってもらうことでその効果の一端を明らかにした。倉田准教授は ICT が専門であり、アプリケーション製作にも非常に長けており、かつ小学校英語についても造詣が深いので、これまでの本研究における知見を反映した、アプリ作成を依頼したのである。

製作したアプリは、iOS 上で動くものであり、今回は iPad にインストールして利用した。

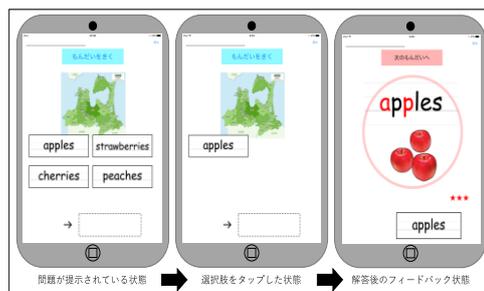
このアプリには以下 5 種類の活動が含まれている。①アルファベット文字一つを指定して、その文字が語頭に含まれている語を音声聞いて選択するもの。②語頭音と語の文字数を提示し、音声を手がかりに語を選択するもの。③他教科・他領域の学習内容を英語教育に取り入れることで、文字の学習と他教科・他領域の学習内容をリンクさせ、文字の学習が単純になりすぎないことを目指したもので、県の特産品(青森であれば“apple”)という文字列を音声のヒントのみで選択するものである。④は「私が好きなものクイズ」と命名され、③同様、他教科の学習内容を踏まえたものである。例えば、青森県から連想される“apple”という文字列が選択肢の中にあり、タップすることでその音声も流れるので学習者はそれを手がかりに単語を選択する。⑤語頭の文字が 1 つだけ表示される、正解の語に関するジャンルや文字数、語頭文字の音声ヒントとして流れるので、そのヒントをもとに語を選択するものである。実際の画面例は以下の通りである。



アプリケーションの画面例①



アプリケーションの画面例③

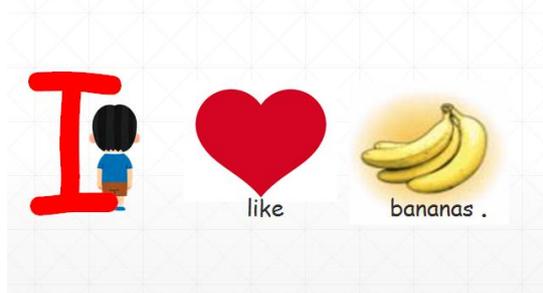


アプリケーションの画面例④

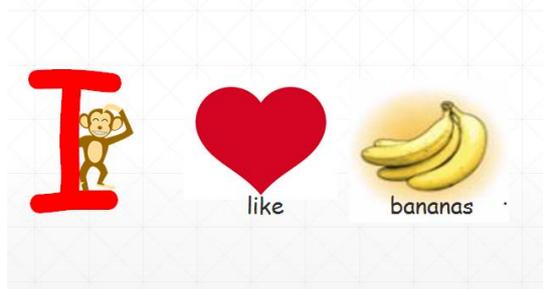
以上を利用してもらい、アンケートを実施した結果として、児童は多少難易度が高く、チャレンジングなものを好む傾向があることや、文字を明示的には教えないにもかかわらず、ICT を操作しながら自然に音（おん）と文字の関係を学ぶことができることなどが明らかとなった。これより、ICT を活用した本アプリケーションの有効性の一端を知ることができたが、一方でアプリケーションのユーザビリティに関しては、多少の改善の余地があることも明らかとなった。

以上(2)(3)より、児童の文字学習の型を踏まえた、明示的な指導をしない文字指導が有効であり、その際 ICT の活用も効果的であるということが示唆された。

(4) 文字指導に加えて、新学習指導要領では文構造の指導という文言が加えられた。これは、日本の英語教育独自の考え方であり、中学校の文法指導につながるものである。しかしながら、文字指導から文構造の指導へ、文構造の指導から文法の指導へとどう指導を系統立ててつなげて行くか、ということに関してはほとんど議論がなされていない。本研究では、文字指導である程度文字の習得ができた児童に対して、「文字を使って」文構造の指導をする、というアイデアを創出し、実際に児童を対象として指導を行ってみた。特に事後の評判が芳しかったものが、英語と日本語の大きな違いとして、英語は主語が義務的であるという点を踏まえた、英語の主語意識を高める指導であった。以下がその例である。



このスライドを見せた後、Who am I?という発問をし、主語 I が誰（何）であるか、ということを類推させる。その後、以下の回答を(Yes. I am a monkey. I like bananas.)提示するのである。



このようなやり取りを相当数行い、主語意識

を高めた後、今度は目的語を空白にし、類推させるという形も考えられる。これは英語は位置で意味の役割が決まるという語順感覚を高める学習である。

これら一連の文構造の指導に関しては、文字指導と関連付けて、更に研究を進めていく必要性も感じられた。

(5) 新学習指導要領における小学校高学年の教科化と中学年から外国語活動開始に伴い、益々教員養成との重要性が増すと考えられる。特に、小学校英語関連2科目3単位以上が、新たに小学校教員免許取得条件となる教員養成課程に在籍する学生達に対し、在学中に文字指導も含めたどのような指導をしていくべきか、ということをはっきりさせることは、小学生に文字をどのように教えるのかということをはっきりさせることと同様に重要であるように思われる。

そこで、今後の教員養成課程における文字指導の展開についての資料を得るために、小学校英語関連の授業を受講する前の学生（教員養成課程在籍）に対してアンケートを実施した。現在すべての分析を終えてはいないが、結果の一端として、①多くの学生が自分の英語力について強い不安を抱えていること、②学生の英語に対する苦手意識が、文字を教えないといけない、正確な発音を教えないといけない、という意識と何らかの相関性があること、などが明らかになってきている。これらは今後の研究課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- (1) 中村典生、新しい時代に必要な資質・能力と主体的・対話的で深い学び、学校教育、査読有、No. 1204、2017、14-21.
- (2) 倉田伸・中村典生、小学校英語の教科化に向けた短時間学習での文字指導を支援知るアプリケーションの開発とユーザビリティに関する評価、長崎大学教育学部紀要(教科教育)、査読有、第57号、2016、245-254.
- (3) 中村典生、文字を読めることと意味がわかることはどう関係しているのか-EFL環境における入門期の文字指導-、言語文化学会論集、査読有、vol. 46、2016、177-189.
- (4) 中村典生、教科化に向けて今考えておくべきこと、教育研究、査読有、No. 1373、2016、18-21.
- (5) 中村典生、文字との出会いをどうするか、初等教育資料、査読有、No. 929、2015、70-73.

(4) 研究協力者 (該当なし)

[学会発表] (計 7 件)

- ① 中村典生、中学年、高学年、中学校へと 5 領域の指導をどうつないでいくか、小学校英語教育学会宮城支部セミナー、2018 年 3 月 10 日、宮城教育大学.
- ② 中村典生、音声指導からつなぐ、今日からできる文字指導、小学校英語教育学会九州ブロックセミナー、2017 年 10 月 21 日、長崎大学.
- ③ 中村典生、EFL 環境における入門期にふさわしい文字指導を考える、第 17 回小学校英語教育学会全国大会、2017 年 7 月 30 日、神戸市外国語大学.
- ④ 中村典生、音と文字の関係について、長崎市教育研究所研究推進員研修講演会、2017 年 3 月 10 日、長崎市民会館.
- ⑤ 中村典生・倉田伸、文字指導における効果的なアプリケーションの開発とその実践、第 17 回小学校英語教育学会全国大会、2016 年 7 月 24 日、宮城教育大学.
- ⑥ 中村典生、児童と文字との出会いをどうするか ―小学校英語の教科化を念頭に―、言語文化学会第 29 回大会、2015 年 12 月 12 日、長崎大学.
- ⑦ 中村典生、『Hi, friends!』を活用した文字活動、第 16 回小学校英語教育学会全国大会、2015 年 7 月 26 日、広島大学.

[図書] (該当なし)

[産業財産権]

○出願状況 (該当なし)

○取得状況 (該当なし)

[その他]

ホームページ等 (該当なし)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村典生 (NAKAMURA, Norio)

長崎大学・教育学部・教授

研究者番号： 70285758

(2) 研究分担者 (該当なし)

(3) 連携研究者 (該当なし)